Oct. 1891
No. 289

女學雜誌

第二百八十九號
明治二十四年十月卅一日發兌

看よ

墓參（ひさご女史）
薪炭（のぶ子女史）
忠孝（カークス女史）
長歌（雲峯子）

至誠

孤兒院の設立及維持（社說）

批評

聖武天皇
ひつじかひ
天無情

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 289. OCTOBER 31ST. 1891.

第二百八十九號目次

EDITORIAL: Sincerity. (The Orphan Asylum, and How it Should be Sustained.)

SCIENTIFIC:—Fuel, Charcoal, Coal.

BIOGRAPHICAL:—Orphan Asylum at Okayama. Nishiwo Katsugoro.

MISCELLANEOUS: "Biwa hima Gawa." (A Poem.) Loyalty and Fidelity from the Christian Point of View. (Miss Caroline Curks.)

HOUSEHOLD:—Only a Word of Kindness.

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

THOUGHTS AND FANCIES:—At a Cemetery. A Keepsake of the One Now Gone.

NOVEL:—"Muscken"

CRITICAL NOTES.

NOTES AND NEWS.

●社說 至誠（孤兒院の設立及維持）
●理學 薪、炭、石炭之事（吉田のぶ）
●史傳 岡山孤兒院、西尾勝之助の傳
●雜錄 琵琶島川（[illegible]峯子）○忠孝の二德に於ける基督教徒の觀念（カークス女史）
●家政 只一片の慰めの言の葉（一書生）
●兒籃 小公子（若松しづ子）
●隨感 墓詣（ひさご）○かたみの單衣（川合信水）
●小說 夢想劍（曙光子）
●批評 聖武天皇○二宮尊德翁○天無情○早稻田文學○ひつじかひ○少年の友○北光台雜誌○消息
●女報 ○詩情○詩を讀む○寄草

小公子

女學雜誌に其あらましを掲げ、いさゝか兒童の慰さめとなしける小公子は、はしなく多くの愛讀者を得て、賞贊の評判一と方ならず。譯文はたとひ瓦の如くとも、原文の玉其間にきらめけばなるべし。讀者の好意謝しまつるに辭はなしと感謝せるものを、とは雜誌のまゝにて埋むるは惜しゝ、是非に綴ぢて讀ものにせよ、吾等が愛子の重寶とせん、吾等が知り人何某々々等の母に贈らん、是非にと促がさるゝ向亦多し。望の外の勵ましに依り、遂に譯文を更に磨き、原本の挿畫を其まゝに寫し挿み、製本を丈夫にし、躰裁を美しくし、お子供衆の讀物、子を持ち玉ふ母御の重寶として、些さか其御需めに應ずる丈けのものとはなしぬ。かくて漸やく出來上りたれば、

大本紙數二百八十頁
密畫七面附圖七箇入

來十一月十日より發賣す

正價三十八錢
郵稅一册に付八錢

或人は言ひ玉へり、小公子を讀むうちは、年長けながら幼ながへりし、無邪氣の其上に反りて暫し天國に遊びたる心地せりと。果して然らんには、此書は亦大人の方の讀物ともなるべし。又或人は言ひ玉へり、生れ付きむくつけく、情けと云ふことを僞りと思ひ、世の中はたゞ利慾と不人情とにて滿ち、人は信じまじきものと思ひたるが、小公子を讀てより初めて眞の愛と云ふものを知れりと、果して然らんには、此書たゞ少年の讀物たるのみにもあらじ。英國にて小公子を演戲にしたるに看客戲場に溢れ數十日引も切らず其書は數十回改版して今尙休まずとぞ、彼地にては近頃尤名ある讀物の一なれば、我國にても亦同じきほどの好遇を受よかしと、原著者の爲に祈るになん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百八十九號
明治二十四年十月卅一日發兌

社説

至誠

孤兒院の設立及維持

至誠とは、人の純然たる本心の謂なり。人の本心とは、即ち神の心なり。而して、神の心、万法を理め、天地を支配す。此故に、神の心に適ふものは、亦た法に合し、天地の趣勢に伴あふ、其行ふ所ろ一として成らざるはなし。本心の至誠、能く万艱に勝つは、之が爲めなり。

祈禱とは、人の本心、神の心に接するの謂なり。人は草木にあらず、ゆえに自由を以て自治し、自治を以て其方向を決す。左れば、祈禱の靈驗あるは、人爲の手を經ずして忽然天より恵福を落下するにあらず。人の本心、神の心に一和し、神の支配に伴隨し、以て善果の應報を收むるなり。此故に、祈禱は靈の誠を以てせざる可らず、誠は即はち聲なき祈なり。至誠の能く幸福を齎らし來るは、祈禱の必らず天の恵福を戴だき歸るに同じ。

人の其本心を忘るゝや久し。虎穴に入りて虎子を得るものはあり、寶山に入りて寶を手にするはあり、然れども、靜坐默然として其本心に歸るものは極めて稀なり。左は言へ、神は居まさゞる所なし、安くんぞ万物の靈たる人の心の中に居まさゞらんや。神の心は長久に人の本心の裏に住ひ玉ふなり。此故に、本心に隨がはざるものは、遂に事を成就すると能はず。たとひ成就せりと云ふと雖ども、其報を受ると能はず。衆皆な喝采して之を賞贊ゆるとき、彼密かに省みて心に疚しき所あり、樂しからざる也。吹荒るゝ風は休む時あるべし、本心の風は休まざるなり、人の聲は寢ね靜まるとあるべし、本心の眼は此時いよ〱明らかなり。樹陰小暗くして、己が影だに見へざるとき、我が本心は何在り、即はち神は其處に居ますなり。誰か、本心の嚴そかなるとを忘るゝものぞ。ビクトル、ユゴは、ジーン、バルジアンの爲に其感を記して云へり、廣漠たる大洋海よりも更に偉大なる觀あり、そは本心なり、いや高き天津空よりも更に偉大なる觀あり、そは靈魂の内景なり、人の思ひの理想（本心の望）に趨むく勢力は、海

の波の岸邊に反るが如し、誰か能く之を遮ぎり止めん、舟人は之を潮と云ひ、罪人は之を悔と云ふ、神は本心のうちに此の大搖動を起させ玉ふ。

今の世の事業は、肉の外より發す、本心の裏より出るもの少なし。此故に、巍峨たる高樓大廈の空に聳ゆるものを見ては昔し某子の言へりし如く、われ其美ある結構を見ず、たゞ民の涙と血とを見ると言はん。延々たる千里の鐵道、曠茫々野蔓々たる間に長走するを見ては、われ大道の坦々たるを見ず、たゞ長蛇の毒舌を吐いて徘徊ひ行くを見ると言はん。かゝる事業は、畏れの爲の事業なり、黄金の爲の事業なり、肉皮の上の事業なり、本心より出る事業にはあらざる也。夫れ、石も之を高きより落せば、重量を生じて地上に落つ、其力少なきにあらず。人も亦た、黄金、聲名、肉皮などの力を以て事業を成すとき、之に多少の力を存して而して之に多少の成効あるは、言を待たず。然れども、彼等は、其本心の至誠より發して之を成さゞるが故に、神の靈の心に合すると能はず、神の助けに乘じて、長久永遠の成効を遂ぐること能はざるなり。

至誠より發するの心は、既に神の心に合したり、天上天下、何處に往くとして之に優るの大助あらんや。神は、我を綠の野に伏させ、いこひの水濱にともなひ玉ふ、たとひわれ死のかげの谷を歩むとも禍害を恐れじ、爾我と共に在せばなり、なんぢの笞なんぢの杖われを慰さむ、なんぢ我仇のまへに我ために筵をまふけ、わが首に膏をそゝぎたまふ、我酒杯はあふるゝなり。

至誠より發する心は、直ちに人の本心に徹す。目は目に映じ、口は口に應ず。人の本心に通ずるものは、即はち人の本心のみ。ゆえに、本心の至誠は、人の至誠を動かし、人の眞の助勢を受く。好言令色は友を得ると能はず、名利權勢は心を得ると能はず、たゞ人の本心のみ能く人の本心を得る也。萬づの事業を成すもの、皆な此の覺悟なかる可らず。事業は神の助けと人の同情とを得ざる可らず、而して此あらんとせば、人は其本心の至誠より事業を發起せずんばある可らず。況んや、世の慈善、教育、改良、の如き事業に從ふものに於てをや。もし尋常一汎の冷々たる經濟處理の法にのみ準據せんとせば、其事業は落石の動力に似たる器械的の助けにより

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て多少は成功すべし、遂に盛に於けるの成業を遂ぐると能はざる也。

今ま、孤兒院の例を以て、此眞理を示さん。ゼチジ、ミウレルは、祈禱を以て、其英國第一の孤兒院を成就したり。彼は神に祈禱るとを以て無上の助けと信ぜり、人の定りたる寄附を以て寧ろ定まりなきものと見做したるなり。實に人の寄附は定まりあるし、左れど其本心は賴むべきなり、ミウレルが祈禱より發する至誠は、神の心に合し、亦た人の本心に通ぜり。此故に英國の人は、ミウレルの事業を棄て難きとに思ひ、人皆な名を隱くして本心の寄附を爲しぬ。愛はいつ迄も落るとなし。ミウレルが至誠に發する事業は則はち長久に成効したり。

我國岡山孤兒院の如き亦た是なり。心あるもの誰か此の孤兒院の事を忘れんや、忘れんとするも本心は常に之を記臆するなり。孤兒院の兄姉は、定まりたる寄附者補助者を有せず、たゞ日毎に祈禱せり、祈禱は則はち彼人々の第一の定資たるなり。而して、此の定資は實に幾多無名の人の本心を動かし、岡山孤兒院は知らざる所ろより寄附を賜はり、月に不足なく維持するなり。彼の院、初めは、寄附者を定め、月に若干の金額を受け、之に據りたり。然れども、かゝる定額は眞の定額にあらざりき。院は月々に困苦したるなり。一期飜然、至誠によりて神に祈禱するとをのみ賴みにしたるより此の方、院の礎は、万世の大道の上に建ちぬ。

ゼチヂ、ミウレルの至誠に動き、之を助くるものは、啻に之に金米衣食を寄附するもの丶みに非ず、自ら奮つて亦各所に同一の孤兒院を設立するもの起る。是れ無上最大の助けにあらずや。たとひ夫自らに寄附するとなしといへども、他に於て他の孤兒を養育するは、則はち其事業を他の地に擴張したるに均し、之に優る助力あらんや。ミウレルは則はち各所に其友を得たり。就中米國には、シカゴにシップマン氏の「フワウンドリング、ホーム」を得たり、我日本には、石井十次氏其他兄姉等が岡山孤兒院を得たり。

而して、岡山孤兒院は、其至誠により亦た多くの同志者を各所に起したり。播州龍野に於ける、富井定助氏が孤育院の類は申すに及ばず、播州赤穗郡矢の村に於ける博愛社、北海に於ける林竹太郎氏が北海孤兒院、東京府下に於ける大須賀亮

一氏其他の東京救育院の如き皆是なり。

前號には、右博愛社が岡山孤兒院に合したることを報道したり。抑そも、播州赤穗郡矢の村の博愛社なるものは、至誠の人少數が團結したる、近來甚はだ美なる一會合なりき。或人は其私產を悉とく擧て之に寄附し以て社員が自耕自給の用に充てたり。或る人は東京立教學校の卒業間近なるに猶ひ出で丶此團結の教育事業に從事したり。又或る人は西京同志社を出で丶年少算盤を提さげ自ら其會計に一身を委ねたり。斯て彼の人々は晝は耕し夜は讀み、暇を作つて學生に教へ、學生に農耕せしめて自治の資を供へ、明治の天下に一の小理想鄕を造らんとしたり。此團結が月々發兌せる博愛雜誌の最近號の記事により、此社員が日々如何なる事を成せしかの一斑を左に示さんとす、

◎本社記事

博愛社書記

九月一日社長小橋氏要用ありて小犬丸村に行かる〇二日記事なし〇三日記事なし〇四日同志社生徒安部清遣君來社せらる〇五日安部君本社を去らる社長小橋氏傳道の爲赤穗に行かる〇六日午后生徒の爲に日曜學校を開き夜說教會及大人の日曜學校を開く〇七日記事なし〇八日記事なし〇九日社長小橋氏赤穗より歸社せらる〇十日社長小橋氏家政掛村尾ヨシ子の二氏要用ありて高田村に行かる〇十一日社長小橋氏午前に村尾氏午前に歸社せらる夜演說會を開く〇十二日社長小橋氏神戶地方に向て出發せらる〇十三日午后二組の日曜學校を開き夜は演說會あり〇十四日暴雨あり夜に至て止む〇十五日社長小橋氏より來信あり小橋禮太郞氏小河村に往かる〇十六日村尾ヨシ氏其家に歸らる〇十七日小野田鐵彌氏高田村に行かる即日歸社せらる〇十八日社長小橋氏神戶より歸社せらる小野田鐵彌氏高田村に行かる即日歸社せらる村尾ヨシ氏亦歸社せらる夜演說會を開く〇十九日社長小橋氏下土井村水守勇也氏の病氣を訪ふ〇二十日小野田鐵彌氏竹内松之龍野に行き小橋禮太郞氏高田村に行かる〇二十一日社長小橋氏村尾ヨシ氏の爲に送別會を開き各自思ふ所ろを述て忠告せり〇二十二日社長小橋氏及生徒一同村尾ヨシ氏の伯耆米子に往くを那波驛迄見送らる小野田鐵彌氏岡山迄行かる〇二十三日記事なし〇廿四日社員澤田寸二氏來社せらる〇廿五日澤田寸二氏本社より歸途に就き井上恒次氏來社せらる社長小橋氏實業掛小橋實之助氏ボーター氏に面會の爲那波驛に行かる又石井十次兄那波驛迄迎に來らる社長小橋氏相伴ふて岡山に行かる〇廿六日井上恒次氏本社を去らる社長小橋氏小野田鐵彌氏岡山より歸社せらる〇廿七日小橋實之助氏小橋禮太郞氏共に岡山孤兒院參觀の爲出發せらる朝は安息日學校を開き夜は感話祈禱をなす〇廿八日昨日出發の三氏岡山より歸社せられて感話あり廿九日記事なし卅日記事なし

追加四日夜演說會を開く〇廿日午前安息日學校を開き夜は說教會あり

而して、博愛雜誌第十八號(十月五日發行)は、「慈善事業の合同一致を望む」と云へる眞摯熱情の一文を掲げ、右に轉載したる記事文の末に、社員が岡山に行けるよしの記錄見へたるが、果せる哉、此の美なる博愛社と、岡山孤兒院とは遂に合同し

たり。否な博愛社は其全財産を擧げて孤兒院に悉皆寄附したり。如此きは皆至誠と至誠と神の心を通じて相親和混睦したるものにあらずや。

總ての事業皆な然あらざる可らず。然れども、慈善、教育、改良の事業は特に然あらざる可らず。即はち必らずや至誠より發せざる可らずと再言せん。そは幾度び復言すとも決して多からざる也。もし人の本心より發して設立せられ、亦た人の本心によりて維持せらるゝにあらずば、決して成就するとなし、永續するとなし、隆盛するとなし、たとひ成就し永續し隆盛すとも、そは石を積みたらんが如く、土を盛りたらんが如し、人の事業にはあらざる也。かゝる事に奔走するは、野の草の騷ぎ、海の波の翻へるに似たり、人の働らきにはあらざる也。かゝる人の一生は繪卷物を伸たらんが如く、戯演劇を奏したらんが如し、本心の一生にはあらざる也。

東京教育院は、施米袋を各有志の人の家に配り置き、洗米炊飯の際、一にぎり宛入るゝの寄附を請ふなり。院は築地立教女學校内にあり。女學雜誌社に於ても、右袋を取次ぎたしと思へば、志あらん人は惠投を垂れ玉へ。

理學

薪、炭、石炭の事

吉田のぶ子

薪を分析しますと大概炭、酸、水、窒、の四元素を始めとし灰となりて留るべき加里、曹達等の鑛物質を多少含むでゐますが之を燃燒して温熱をとると云ふ目的に對して必要なる元素は唯炭素と水素の二元素のみです。然るに炭素一斤と水素一斤とを燃し其間に生ずる熱の量を測つて見ますと其量が大層違ひます、即ち炭素一磅を燃して生ずる所の熱は攝氏零度の冷水七十五磅を沸騰せしむるに過ぎざれど、之と同量の水素を燃して生ずる熱量は殆んど之の三倍です。又炭素と水素が燃燒する際、要する酸素の量を調べますに之れも亦同じことではありませぬ。水素が一匁燃えるとも費える酸素は八匁ですが、炭素一匁を燃すには二匁と三分の二で足ります。そうして見ますと物が燃るとき生ずる熱は、其間に要する酸素の量に大關係のあるものに違ひあるまいと思ひます。故に炭素や水素に富む良き薪を用ひても、燃し方が惡つて空氣の流通が充分でなければ、其甲斐はありません。堅木も雜木に劣

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ることがあります。實よく注意しなければなりませぬ。

薪は又充分枯れて居るものを撰ばなければなりませぬ。伐りたての木は何でも多少水分を含んで居ります、其分量は伐る時節と木の種類に由て異るは勿論のことですが、先づ百分の二十から五十の間です。今或る伐木を一ヶ年間空氣中に曝露して置きますれば、其中に含む水の過半を失ひ、大低百分の十五位に減じます。箇樣なる薪を枯れた與木と云ひます。其れ故に薪は少くとも伐木後滿一ヶ年を經たものでなければなりませぬ。水分を多く含む薪は二ッの害があります。第一燃え附き難くして使用上不便を感じ、第二水分が飛散するとき多くの熱が潛みます。

木炭は木を淺き穴中に積みあげ其外部を土にて覆ふか或は他の適當なる密器中に入れて蒸し燒きにして製するものです。其質は輕く孔多くして、其孔の中には多分の酸素を吸入し居る故に、極て燃え易く、燃燒の際惡臭を發することなく、又殆んど純粹と稱するに足る可き程の炭素を含むを以て、燃えて生ずる所の熱も隨て多く、他の燃材の追く及ばざる所です。即ち木炭一斤と石炭一斤とを燃し由て生ずる所の熱を測りますに、木炭の熱を七十三とすれば、石炭は六十にて、薪に至りては、極上等のものにても三十五に過ぎませぬ。

又石炭は前世の植物が地中に埋れ、分解して氣發分を失ひ、强壓の爲めに其質密緻になりたるものにして、其地中にある年代の新舊に從ひ、之を四種に分ちます。即ち無烟炭、通常石炭、褐炭、泥炭です。

史傳

岡山孤兒院、西尾勝之助の傳　光延品。

此一篇は、孤兒院主任者石井十次君の日誌に基づき記載したるもの、敢て文飾せざる[illegible]なり、詳細なることは追つて一小冊子となし永く孤兒院に存せんと欲す。

アヽ岡山孤兒院の花は散されたり、予この訃音に接し、哀惜の情禁じ難く、夢に臥することこゝ三日、食を斷つことこゝ二たび、臥れて安眠せず、繰返し〳〵兒が在世の稚態を想起し、忘れんと欲して忘るゝ能はず、幻影つれに眼前にあり」、とは石井君が實子の如く深愛せる西尾勝之助が、二千餘里の彼岸北米カリホルニヤに於て永眠せし悲報に接したる時、自から其日誌に誌したる弔詞なり、今抄錄して同情同感の兄姉に一讀の勞を煩はす。

誕生及性質　石井君が愛子、名は勝之助、性は西尾、明治十年四月廿六日大坂東區西横堀二丁目五拾七番邸に生る、父菜は六歳の時他界の人となり、慈母政の手に養はる、長ずるに從ひ放縱不羈母の制馭に服せず、月謝を持たしめ學校に行かしむれば、母を詐りて之れを消費し敢て學ばんともせず、時々隙を窺ひて店頭の金錢を掠取り、近隣の惡兒童と共に、或は種々の遊行を企て或は菓物等を買ひ來りて食せり、於是慈母大に困し、人を頼みて丁稚奉公に遣はせば直に逃れ歸

り、迷惑を掛くること少なからず、母爺々困じ果て、親族相計り懲治監に入れんと決せり、或人之れを聞き不憫に堪へず基督教の感化に托せんことを勸む、母固より基督教を厭ふも止むなく之れに從ひ、協議の上大坂基督會員荒井榮藏氏に托す、暫時にして悪習再び發し、同氏の金錢を掠むるなど暴行言語に絶す、困却の餘終に孤兒院に送り來らる、于時明治廿二年七月十一日なりき、入院の當時凡そ半ヶ年許り、所謂餓鬼大將となりて衆兒を苦しめ、毫も心を善事に止めず、却りて害悪を他に及ぼさんとするの恐あり、且到底移善の目途なきにより、再び荒井氏に托し歸さんとせしこと數回、今暫らく忍耐せんとのことより彼是時日を經過する内、何時しか信仰の眼彼れが心中に開らけ、從つて天賦の美質を顯はし溫順謹愼の德日に增加はり、殆んど一ヶ年の後には別人の感を懷かしむるに至る、廿四年四月組合教會の年會岡山に開かれ際、傳道會社負債金のことに及ぶや、感激して金貳拾錢を寄附す、彼れが一片の赤心は全國諸教會に傳はり、幾多人士の義俠心を喚起し負債償却上容易ならざる助けを與へたり、又嘗て病める父親と十歳許りなる小女、行き倒れ將に餓死せんとするを聞くや、彼一飯の愛を割ひて悉く施與したることもありき、改心の後詩篇廿七篇十節を引き、常に人に語りて云ふ、

「わが父母われをすつるもエホバわれを迎へたまはん」

洋行及訣別。　廿四年五月廿日夕、孤兒院の土曜日演說會の際、宣教師ペテー氏神戶タウソン氏よりの報を傳ふ、或米國婦人漫遊の途次神戶に來り、孤兒院の男兒一人を伴ひ歸り養育せんとの希望ありと、石井君之れを聞き大に喜び、直ちに全會に告げ猶つて渡米の志望あるものは、明晚までに來り告んことを約す、全夜勝之助來り謂へらく、「父上よ米國に行くことの聖旨に適へるを悟る願くは兒を遣はせ、」又或人に語りて曰く「予往かずんば恐くは他に往くべき者あらず」と、其自任の氣象以て見るべきなり。

石井君神戶に至りタウソン、グリナン二教師の紹介により、パックストン夫人に面會す、是小供を伴ひ歸らんと謂はれし其人なり、左に其問答の一二を記さん、

石　井　君　何故に日本の小供を望まるゝや、

パックストン夫人　嘗て米國に於て、在桑港の日本小供を招き育て居りしが、中途にして去れり、今般漫遊して貴國に來り、日本人氣質の優美なるに感じ遂にタウソン氏により懇望したる次第なり、

石　井　君　學問を爲さしむる目的なりや、將た實業なりや、

パックストン夫人　學問にあらず實業なり、故に体格壯健にして性質從しく極學問嫌なるを望む、何分學問好ぎの小供は、實業を怠るが故不適當なり、

石井君心裡に其要求の勝之助に暗合することを感ず、蓋し彼れは体軀健全性質優しき所あり、而して極學問嫌ひなるが故なり、於是直ちに電報を以て彼れを招き、同夫人に面會せしむ、夫人彼れが肥大なると無病なる顏色とを喜び愈伴ひ歸ることゝなりぬ。

勝之助慈母に洋行の許諾を請はんがため、大坂の實家に歸る、店頭に腰打かけ母に謂ひけるは、「母上〻、兒は一ッの願ありて歸宅しぬ果して許し給はるや否」、母は驚き、「何の求めなりや語らざれば解せず、兎に角内に上るべし、」彼語を繼ひで、「もし許しを約束したまはゞ仰に從ふべし」、然らざれば直ちに歸阪すべし母色々宥め漸く内に上らしむ、彼れ是に於て告ぐるに洋行の事を以てす、母大に喫驚し淚を垂れ且諭して云ふ、「勝よ能く聞け、父身逝りしより最早八年、婦女の身を以て種々の苦難に耐へ、辛らき渡世をなし來りしも、たゞ汝の成長を賴めばなり、サテモ意外の求めをなすもの哉、なにとぞ思ひ止まり　商用手助をなし得意先きを廻り、メリヤス或は煙草等を賣り、以て母を安心せしめよ」、彼毅然撓まず「母上よ、母上はサモ思ひ給はんなれど、兒は煙草等を賣り廻るべきものにあらず、斯ることを爲すものとは人物が違ふなり、兒はこれより神のため、國のため、生命を棄て、働かざるべからず」、と答ふ、母も其精神に感じ、思へば我子ながらも見上げたる心得なりと、自から恥ぢて返すべき言葉もなく、止むを得ず許容を與ふ、留ること三日、慈母に告別して孤兒院に歸る。

六月廿八日、彼れが爲め盛なる送別會を開く、席上立ちて將來の希望を述ぶ、

予は他の目的ありて渡米するものにあらず、たゞ生涯理髮傳道資本金を得るために、即ち神の爲め國の爲め同胞のため、殊に我孤兒院諸兄弟の爲め、彼の地に道を開くに往くなり、諸君希くは予の爲め常に祈り玉へ」

七月十四日、石井君勝之助を伴ひ横濱に送る、十六日午前九時、郵船ペキン號に乘込む、須臾にして滊笛一聲波を蹴りて進行す、パックストン夫人及勝之助は甲板上の鉄欄に倚り、さすが名殘りの惜まれけん、影消失するまで岸邊を眺めて佇

れり、是石井君が妻子と訣るゝ最後の瞬間にして、誰れか知らん生別死別を兼ねんとは。

理髪傳道學館由來及設立。　曾て石井君數友なる理髪職淺沼某を訪ふの途次、不圖理髪職を以て自活し、天下に散在して主の證人たる自給傳道者を養成せんとの理想浮び來る、直ちに之れを某に語りしに賛成しぬ、歸りて衆兄に向ひ其意見を述べ且同意者を求む、茲に醵じ起立せしは勝之助にして、此は洋行の四ヶ月前にてありき、彼れ其日より喜び勇んで淺沼某に至り、理髪の技を學び始む、蓋し二三年後の卒業を待ちて、彼れを主任者となし此事を實行するの企望なりき、其後渡米するや、彼れは何處にあるも生涯理髪傳道のために全心全力を盡し、且渡米の上は自から働らき、或は有志家に說き得たる所を送り來らんと語り居たり、然るにメクストン夫人は出立の前、金四拾參圓六拾錢を孤兒院に與へらる、此淺措金勝之助に因みあるを以て、使用して理髪學館の基礎を置くことゝ定めぬ、是れ豫想より早く設立を見るに至りたる所以なり、今や淺沼某を教師に依頼し、小兒六名を選拔して其技を習はしむ、夫れ理髪學館の關係如何に勝之助に多きことよ、

就眠。　勝之助は十四日間の旅行にて米國に安着せり時に七月三十日、寸語通ぜず風土氣候異なり衣食住異なり、彼れの境遇は全く一變しぬ、八月廿日病に臥す、醫師診斷して烈しき胃熱なりと云ふ、蓋し消食の結果より起る、メクストン夫人來信の一節に云ふ。

御病氣中は石井樣の事のみ仰せられ小妹に向ひ何時御歸あるやと屢々御尋ねに相成候得共御遠方のことなれば御出來は相叶ふまじくと申候處勝殿はいたく力を落し悲しく感じられたる樣に見受申候……御就眠前日本語にて何か仰せられ候得共知らぬ悲しさ更に相分り不申候

彼れは未だ會話に通ぜざりき、看護せし人々は悉皆日本語を知らざりき、二千餘里の異郷彼れの身は如何に寂寞無聊を感ぜしぞ、其頃憶ひやるだに哀れなり、彼此世に存する十三年四ヶ月、米國に在る僅々廿有五日、太平洋上船路の夢未だ全く醒めざるに、又もや天國の旅行を續けたり。

今や理髪學館は彼れの紀念となり終りぬ、彼のもたらせる志望は灰滅に歸するものならんや、噫彼れが最後に臨み此世に遺したる言葉は、彼を看護せる死の空氣、將た何處へか傳へ行きけん、靈の耳ある者之れを聞かんのみ。

雜錄

琵琶島川

雲峯生

（一）
世にも稀なる　女郎花
床しき色に　咲にけり
野邊の氣色に　錦なす
千草の花も　及ばじな
とまる胡蝶は　雲井より
おりゐる愛も　忘るらん
妙に匂へる　花の上に
心のどかに　わぶるらん

（二）
たのしく結ぶ　むば玉の
夢はさめずも　あらまほし
斯て此世は　くれたけの
悲しきふしは　なくもがな
されば野末の　女郎花
いかに幸ある　花ならん

（三）
されば胡蝶の　夢の世は
いかに樂しき　ものならん
心たのしき　時にこそ
ひまゆく駒は　いそぐなれ
うき世忘れつ　結びける
夢は早くも　さめにけり
空のあらしの　ふくなへに
胡蝶は双羽　ひるがへし
あはれを花に　殘しても
遠く雲井に　かへりけり

（四）
ひとり立野の　女郎花
あぢきなき身を　歎くらん
さそはんものは　嵐のみ
かゝらんものは　涙のみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つれなくも置く露ふかみ　うつろいぬ
昔の色は
やつれし姿　いかばかり
榮華の夢を　忍ぶらん

(五)空ふくあらし　心あらば
野末になやむ　身の上を
雲井の君に　つげなゝん
ありし昔の　なさけをば
君は今なぞ　わするべき
雲井の上に　ありとても
昔おり居し　我君よ
我をあはれと　かへり見よ

(六)なさけを知や　天つかり
汝が翅を　かさゝん
我も雲井に　行なまし
何處の野邊に　さすらふも
いにし君をば　慕はなん
さらずば我も　汝が如く
うき世の空に　身のうさを
聲の限りは　音になかん

(七)空のあらしは　心なや
ふきさはぐ也　あだにのみ
なく郭公　心なや
遙けき空に　なのるのみ
雲井の君は　なさけなや
何處に今は　在はすらん
我をすてゝも　かへりける
心の程ぞ　うらめしき

(八)今は仇なる　かたみをば
手に取上げて　ならすかな
我うらみをば　しら菊の
琵琶の音のみ　昔なり
これや變らぬ　聲かとて
忍ぶとすれば　おちきなき
世のさまのみぞ　歎かるゝ
君がおとのみ　慕はれて

(九)雨とふりなば　我なみだ
雲晴れなば　やみぬべし
露と置きなば　我なみだ
日かげ匂はば　消えはてん
されば淵にと　沈まゝし
ふかき恨は　涙川
絶えせん時し　あらざれば
末の世までも　そゝがあん

(十)野分の風か　水音か
身にしむ計り　ひゞく也
鐘も聞えず　なりはてゝ
野川の音ぞ　ものすごし
岸の岩根に　立つはたぞ
ザンブとひゞく　水の音
夜半の嵐に　埋れぬ

＊＊＊＊＊

嘗て尾陽にあり、金城を去る北に一里許、堤防西より東に至るあり、堤上の松樹整々列立するを見る、之を問へば琵琶島川と云ふ、昔時平氏拄盛の頃太政大臣師長公罪を得て清盛の爲に尾州に流さる、流竄の地は金城の西にあり、此地の豪富某の家に一娘あり、公是に遇ひ、遂に別離を惜むに至りき、刑期充ち、其將に去らんとするに當り公が嘗て愛玩せし琵琶を與へしが娘遂に止む能はず、公を慕ひ、此川に至り、遂に追及する能はざるを知り、河上の木末に琵琶（所謂白菊の琵琶といふは即是也）を掛け、身を水中に投じて死せり、由て川に此名あ

りといふ、師長流刑に遇ふの事正史にも見ゆ、源平盛衰記には更に精し、公の行爲もとより公明なりと云ふべからざるもまた今日を以て判すべきにあらず、其心事と娘が不遇を思へば何人も憐れまざるものなけん、一詩をものせしもの實に蹴に非るあり（今夏起草せし所、今校訂して送る）。

忠孝の二義に於る、

基督敎徒の觀念。

カークス女史述

いかなるを忠といひ、いかなるを孝といふ。忠孝とは、君と親とを愛するの道にして、凡そ人と生れたるものは、その親をゝもはざるなく、その君をあいせざるなし。いかなるを君と親とをあいするのまことゝいふ。神をうやまふは、君をあいし親をゝもふの道にして、生としいけるもの、神をうやまはずしてよきはなし。凡そ人のこの世にうまれ、いのちをながらふるは、皆神のたまものなれば、神ありてぞよろづのものゝ道もたつなれ。神ありてぞ、君臣父子の緣もむすばるゝなれ。故に人のなすべきは、神を愛するより先なるはなし。エスのおん言葉にも、こゝろを竭して神をあいせよと、つげたまはりぬ。親の子をゝもひ、子の親をしたふ前、君の臣をいたはり、臣の君をあいする前、君臣父子まづともに神前にひざまづきて、一切の我をかへりみべきものなり。されば、人の道いかにとキリスト信者にとへ。神をうやまへといふ、親をゝもへといふ、人をあいせよといふ。誠や天地の大道は一にして、敬神と忠孝とは、相もとるものにあらず。たゞその理想の天道の行なひがたきは、信者の罪にして、道の罪なるにあらざるのみ。一善と雖もおこなひがたき人のつねを以て、本然の至性にかへらざれば、何を以て天道のまことをゝこなはんや。人あり、君にちうなれば神をうやまいがたし、神をうやまへば親にこうなりがたしとなじる。これ思はざるの太甚しきなり。こゝろみに儒敎の孝道を見よ、子の身命は親の手のうちにありとおしへたるものは、幼時、親の一存にありし養育の念の、あやまり轉じたるものにして、遂に子といふものゝ、後の親にして、我なる親のまへの子なりしといふを、なをざりにし、親の我のみは、人とこそ思へ、その子をば、庭前の木石と思ひなしたるに異ならざるが如し。故に、

子は其わりと知る良心を知らずとして、一命を親の犠牲にささぐるを悲しまず、おそろしくあやしきを最醇の孝行となして、物の本にもかき記すとおほし。故に、孝行のしよ念あるものも、ついに變じて天の自然にそむく、是非理也。しかのみならず、法律と風習とによりて、親の其子を罪魔にみちびくといふごとき、世に、大害の基ひたること、史をひもとかずして顯然ならずや。思へかし、親のために身を苦海にしづむるといふは、人の本心にそむけることなり。本心にそむける業にして、孝道いづこに立つべきや。その立ざるをたつとしとして、孝行者よと賞歎するは、これ子の身命を親のものなりといふなる、かの孝道のあやまりなるのみ。キリスト教の國におひては、斯のごとき孝行に罪過のありといふこと、神もみそなはし給ふべきなり。このあやしき風習は、決して賞美すべきものにあらず。いつしか、この國よりはなれさりて、まことの孝道の示現にあはんこと、うたがひのあるべきや。さらば親子のかんけいにおけるキリスト信者のかんねんは、いかに、其孝道はいかに。それ神は、よろづの命のもとひにして、男をとはず、女をとはず、みな其おん配劑に成るものなれば、おの〳〵人生五十年、まれなるもの七十年といふは、この大生命の影とも見よや。無限に逍遙し、人生に照臨して、其罪帳をしらべ給ふものは、上天の神ならずして、たれぞ。この故に生命の任は、かるきものにあらずして、この輕からぬところこそ、我孝道と他孝道とことなるところなりけれ。聖書のはじめには、人間のおひたちを記して、そも〳〵人の祖先が、赤兒をもうけたりしとき、神は人をたまはりたりとよろこびけるとぞ。渠儕はその懦弱ある孤肉を見て、人間の愛泉より流れいでたるよろこびのたよりとなせしのみならず、天地の理を解し、不滅の靈性をそなへたる後日の成人とおもひたりけり。故に、男女をいはず、皆神の生命にすゝがれて、善惡差別のまなこをひらくものなれば、親の恩愛は神前の恩愛たるべきなり。子の孝行は、神前の孝行たるべきなり。是を以て見よ、我孝道のかんねんは、敬神の餘德にして、大道に一途なること、疑ひなし。今この國は、てんちのあたらしき想に熟して、万物すでに一歩高觀のさかひに入らんとす。このときに於て、その平素重んずる孝道をして、はかりがたき迷想の地となさしむる勿れ。非理あるものは、これを

あらたむるに吝ならず、大道の本相をあやまりみとめずして、敬神孝行の一途なる圓滿の理想界にあゆみをむけよ。かの忠道といへども、またしかり。たま〱神をうやまへば、忠君の志を無すといふものは、これキリスト教に通ぜざるの謂にして、皮相の見のそしりをまぬかれず。凡そキリスト教は、忠義をかろんずるにあらざるのみならず、臣たれるものにして其君をあいせざるものは、是キリスト教の罪人也。キリスト信者の見て忠義と存ずるものは、他臣僚の忠義なるものと相逆するところなきにはあらざるべし。されども、其君をあいするに於ては、あへて諸人にことならざる也。其法とするところは、個人の品性をあげよと願ふ道德準標の高かれと願ふ。されば、立つところのいづこなるを撰ばずして、忠道に向ふは易きことなれども、たゞキリスト信者の法とするは、常に正理をはなれずして、忠道に向ふといふにあるのみ。人嘗てキリストを責む、叟のいふところ一々非理なるはなし、然れども、王カイザルをいかんせんやと。イエス則ちこれに答へて、王に盡す可きものは王に盡し、神に致すべきものは神に致せといひ給ひき。神は一人の神にあらずして、天下諸人の神也。末代不易の眞理也。されば上九重のかしこきも、下庶民のいやしきも、心によしとすれば則ちこれを信ずべきものならずや。君臣ともに敬神の大義を重んじて、國家やすらかなるためし、ことあらたに言ふ可きにあらず。むかし人あり、聲をはおちていふ、おのれ儕キリスト信者なるものは、常に天に向て手をあげ、足をのべ、以て天下の安寧と國家の長久しからんことを祈ると。是を以て見よ、我忠義の觀念は、敬神の餘德にして、大道に一途なること、うたがひなし。されば、いかなる國といへども、仁者にくみし、義人にとうし、其國をそこなふためしはあらじ。今キリストは仁者也、義人也、何を以て慈悲恵光のおん影の國北のとこやみを照さゞることやあらん。あゝ久方の光ののどかなる聖道を仰ぎたてまつりて、とこしなへに國家慶運の四海の波にあふるゝをみよや。

秋も中半は過ぎて追々遊獵に好時節とはなれり。一日友人の遊獵仕度甲斐〲しく行き過ぐるを見て机に向ひし一人、

イヨー渡邊君、此上天氣に遊獵に出かけるなんザア、羨しひネ、一體どこへ行んだ？

友人　立川の方さ、實は向ふの宿屋から態々向によこしたんだ。

男　さうか、それで何を打積りなんだネ？

友人　君知れるもんか？　放て見た後でなけやア。

家政

只一片の慰の言の葉　一書生

左に掲ぐるは何人の寄書にや、定かには知れず。たゞ書生が實際の感を書きたるものと信ぜらる。本誌二八一號に掲げたる「夫人と食客との關係」の説に對し、食客置く家の夫人の戒となること多し、前後を併せて覽玉へと請ふ。

雨降りなどに井戸の遠きは不便なればとて、臺所の前三四間の處に堀ることとなり、一週間ばかり前より、植木屋數人來りて、日々朝早くより、夕晩くまで、勤れども、何分もとの井戸より水を引くものなれば、樋を入るに其處を堀り彼處を鑿ち、地下より水の湧くこと甚はだしく、意の如くならざるに「書生等も學校より歸れば間暇だから加勢してもらへ」鶴の一聲、植木屋は得たりかしこし「そんならどうぞ水かへを願ます」とて、我等三人、日々三時よりの水かへ、愛の泉にあらずして怒の泉、くめどもつきず。五時過に至る迄、時ならぬ汗を流すこと、早五日、馴れぬ業とて、手はいたく、しかも只三人にての水かへなれば、二人綱引き、一人の水汲みにて、顏には五色の筋を出し、引ども〳〵大桶の水一ぱい、なか〳〵重く、やつと夕暮に及び、やれまづ今日の地獄の苦遁れたりと、己が室に飛込で、其日の復習、明日の預備、一倍の勉強にて爲し終らんと机に對すれば、かなしや晝の疲れ來て、早やねむ氣ざし、居寢りより先きに打臥す有樣。嗚呼、井井堀の無ならばと、うらみても詮方なく、情けなきは主公なり、僕等の課業の六か敷を御存じなきにあらぬのにと、うなつて見ても、力投首二人の友のうなづくのみ。一日二日ならば此くもある間敷が、あい憎に神嘗祭と日曜引續き、植木屋は大喜び、我等三人は大不平、朝晩食うか食はぬに、「どうぞ又願ひます」など、にこ〳〵顏に云ふを見れば、一層の不快を增し、綱引ながら、ぶつ〳〵言へば、「ソウヂツシヤツタナー、お上の御意だものー、書生かなはねー」など腰落るので、むか〳〵と沸へかへり、幾度怒なつて見ても、詮方なく、幾度をとつて見ても無益なれど、まだ悟り切れぬを寺の和尚で、「殘念だナー……勉強しようと思へば、どれほどでも出來る下宿屋の奴は、笛、皷弓などしやれたあげくに、未だ時があまつてでもいるか、阿房な顏して、欄干と首引などやつてるに、どうか少しにても勉強する時間があればよいと思ふ我々には、平常ですら不足勝なのに、かてゝ加へて如此だ、誰をうら

むと云うわけでもないが、しかしうらめしひ残念だナー。」繰返し〳〵て、日曜の夕方「サー今日で士方學士の免狀を上ますよ」と植木屋の笑ひ聲。やれ〳〵、漸くこれで我等の苦も卒業したとは思つたが、されど此二日間、終日の空費に、不滿と不平に充ちた胸、うれしくもあく、苦笑ひして、今や正に泥手足を淸めんとて、一步ふり返るとき、いらせられたは奥樣、今漸く大略出來上つた新井戸一目見玉ひて、僕等に對ひ、いと慈愛深く「ドウモ〳〵毎日難有御坐いますよ、嘸々お勞でショウヨ——ス〳〵、汐湯においでなさつて、早くおやすみなさいよ」と。嗚呼我等三人如何に難有く、如何に滿足に感ジマシタか。コハ實に皆樣方の御想像外でありますの今迄にへ返つた胸中の熱湯も、今迄鬱しに鬱した腦中の不平も、只一句、此慈愛ある語にて全く反對の觀を呈しました。する事があれば、も少し爲し度、働く事があればも少し働きたく、思ふ樣で、初めて樂しく、只何んとなく愉く、僕等が爲に殊に命じ玉へる好物に空腹を充たし、僕等が爲殊に勝ひ玉へる石鹼を携へ、三人談笑の內、不平の塵、不滿の垢を洗ひ落して、快よく〳〵、實に快よく〳〵、大の字形に寢に就つゝ、神に感謝し、且つ、奥樣の上に御惠みあらんことを默禱しました。只一片の慰の言葉、只一句の慈愛の言葉、實に我々に取つては、千萬無量の黃金に勝ます。書生當玉ふ方樣たち、只一片の慈愛の語、決して惜み玉ふなかれ。

兒籃

小公子

第十二回（承前）

若松しづ子

さて客人が一人殘らず立去つた後で、ハ氏は火の側を離れ、長倚子へ近寄つて、そこに寢て居る若殿の姿を立つたまゝ眺めて居升た。フォントルロイは、ゆつくり休息して居りました。兩足は又の字になつて、長倚子の端に懸り、片手はつむりの上へ投げ出した樣に廻り其靜かな顏には、ポット紅色がさして居て、宛も健康で、氣樂な幼子の安眠を畫に書いた樣でした。キラ〳〵と光る髮のもつれが、繻子の布團の上にさまよつて居る鹽梅などは、實に畫にしても、美事な畫でした。ハ氏は此姿を眺めつゝ、手を擧げて、ツル〳〵した腮を撫で

ながら、當惑極まる顔をして居り升た。
突然、後ろに老侯の粗暴な聲で、
　イヤ、ハヴィシヤム、何事だ？、何か新らしく起つたのだナ、容易ならぬ一條と申たのは、なにか、いつて聞せるが好い。
ハ氏はまだ腮を頻りに撫でながら、長倚子に後ろを向けて、
御前、凶報で御座り升、非常な凶報で、手前も誠に申上憎う御座り升。
侯爵は、最前からハ氏のたゞならぬ様子振りを見て、安からぬ思をして居られたのでしたが、此お人は、心に安からぬとが有れば、必ず不機嫌なのでした。此時も、心中のいらだちを聲に現はして、
　ハヴィシヤム、なぜ又其子供を左樣に眺めて居るのだ？。全躰最前から眼を離さず見て居るのは……コレハヴィシヤム蛇が小鳥を見込んだ樣に、子供を眺めてゐる理由を申さぬのか？、第一、其凶報がフォントルロイと何の關係があるのだ？。
御前、極く手短かに申上ませう、此凶報と申したのは、一切フォントルロイ殿の關係で御座り升。其一條を假に眞と致し升れば、彼處に御寐遊ばすのは、フォントルロイ殿ではなく、カプテン、エロルの御子息と申丈に止りますので、實のフォントルロイ殿は、御嫡子ビーヴィス君の御子息で、現在、ロンドンある下宿屋に投宿されて居る御方で御座り升。
侯爵は此時兩手に青筋が太く〳〵と見える迄に椅子の臂掛を握りしめられ、額にも同樣の物が顯はれて、其烈しい老顔は、殆んど赤黒くなり升た。そこで大聲にイキマイて、
　貴樣は何を申す？、亂心でも致したか？、さもなくば、誰の欺に乘つたのだ？。
先づ僞と致しましても、誠に實際に類した話で御座り升。
イヤ、いかにも苦く〳〵敷いとで、實は今朝一人の婦人が拙宅を訪ひ升て、六年以前に御嫡子、ビーヴィス君が結婚遊ばされた人と申立て、結婚證明狀を持參いたしまして御座升。其人の申立に、婚姻の一年程後、御兩人の間に何か口論が有つた末、とう〳〵若干の金子を頂戴して、お別れ申すとになり升のださうで御座り升。處が、五才許りの男子を連れて居るので御座り升。其人と申すは、極く下等の米國人で、先づ無學な方で、昨今までも、其子供が申受けらる可き特

權のことも存じ寄なかつた次第で御座り升。然るに代言人と語り合升して。我が子が正しくフォントルロイ殿で、追つて、ドリンコート城主たる可き者と承知した由で、そこで、手もなく、其權利を主張いたすので御座り升。

此時、黄襦子の上なるチヤレ頭が一寸動き升て、寐むさうで長い歎息が開いた唇からソウット出升て、寐歸りをいたし升たが、少しもモヂ〳〵したり、心地のわるさうな處は有ませんかつた。自分が瞞着者で、フォントルロイでもなければ、ドリンコート城主などに登るとは決してないといふ證據が擧つて、それが安眠の邪魔になる樣子は一向有ませんかつた。たゞ、嚴粛に其顔を眺めて居つた老人に、其さうび色の顔を備よく見せるかの樣に向け升た。

老侯の立派な澁ぶいお顔は、見るも氣味わるい樣になり、それで、極く冷たく、邪氣のある嘲笑が見えて居り升た。

イヤ卑劣、破廉恥極まる其處業が、ビーヴィスに有りさうなことでなければ、一言半句も今の話しを眞とは信ぜぬが、ビーヴィスにはさも有りさうなことだ、あれは不名譽極まる奴で有つた、イヤおれの嫡子ビーヴィスほど荏弱で、不正直で、卑劣なことの好きな人非人はないワ、其婦も無學で賤しい者と申すか。

申すも憚では御座り升が、無教育なことは御自分の姓名を記るすさへ漸くで、それで、憚る處なく金錢を見込んで此申立をするので御座り升、金錢の外に目指ことも無い樣で御座り升。容貌丈は下品ながら美麗では御座り升が……

嗜好の六ヶ敷い老成人は、此時口を鉗み、思出したことが有つたと見えて、身震ひいたし升た。

老侯の額の青筋は、紫の打紐の如く太〳〵と現れ、感憤極まつて、冷たき汗の滴りさへ見えて居升た。今、ハンケチを取出して、それを拭ひ、其冷笑はます〳〵邪氣を帶びて、

然るにおれはモ一人の女を憚つて居たのだ、アレ……あの子供のお袋を、おれはあれさへ嫁と認めなんだのだ。姓名を記す位は差支のない方を憎くんだが、これが其應報でも有らう。

かふいつて、突然倚子から跳ね擧り、室内をあちら、こちらと歩るき始め、猛烈極まる言葉が其お口から湧出るかの樣に發し升た。憤怒と、憎惡と、非常な落膽が集つて、暴風が木を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

振るふが如くに、老侯の一身を振ひ動かし升た。老侯の心の亂脈は見るも恐ろしい樣でしたが、さりとて、猛り立つて、最も恐ろ敷い時も、彼の黄繻子の上に寐むる姿を忘れる樣子はなく、それを覺す丈の聲をも出されなかつたとは、ハ氏も氣がつき升た。

イヤ、さもあらう、あいつら（小供たちのと）は生れた其始からおれの外聞であつたのだ。おれも、あいつらは大嫌で、あいつらもおれを憎くんだのだ。其内ビーヴィスは一層わるい奴で有つた。併し此事はまだ全く信用を置ぬから、こちらも充分探索し通してやらう。ダガ、考へて見ればビーヴィスには有りさうなとだナア、どふもその位のとは有つたとだらう。

かふいつて又憤激し、頻りに其婦人のと又證據物のとなどに付て委細に尋問し、室をあちらこちらと歩みながら憤激の情を抑へやうとしても、顏色は青くなつたり紫色になつたりし升た。終に一分始終を聞終つて、そして、極く心配になる廉々を了知しました時、ハ氏も老侯の爲に氣遣つて、お顏を見た位でした。此時は最早顏色は丸で、青ざめて、落膽極まる樣子でした。老侯は憤怒を發し玉ふ度に、多少身に疲勞を覺へられ升たが、此度は又純粹の憤怒でなく、他に情が加り升たから、尚さらガツカリ弱られたのでした。

終に長椅子の側へ歸り、立ちながら、低いよろめいた樣な、カス〲した聲で、

たとひ人が豫めおれに子供を寵愛なさるとが有らうなどと申たとて、容易に信じる處ではなかつたが、おれは全躰子供は大嫌で、中にも自分のは厭に思つたが、おれは此子丈は誠に可愛く思ふのだ、あれも亦よく懷ついて居るのだ。（といつて苦々しいといふ笑を口元に見せ）おれは、人望はないのだ、始めから人望はないのだが、此子丈はおれが好だ、おれをこわがりもせず、いつもおれを信じて居るのだ。此一條がなければ、おれのあとは、餘程の勝れ者が城主になつて、先祖の家名を起すと、おれもよく承知して居つたのだ。

此時腰を屈めて、可愛い〻寐顏を見詰め、彼のフサ〲した眉を恐ろしく顰められ升たが、少しも容貌に烈しい所は有ませんかつた。それから手で子供の額からキラ〲した髮を拂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ひ除け、經て、振り向いて呼鈴を鳴らされ升た。彼の丈高き給事がお召によつて立現はれ升た時、老侯は長椅子に指ざし、ソレ（といつて、少し調子を變へ）フォントルロイを綠間へ連れて參れ。

隨感

墓參

ひさご女史

杖ともおもへりし人、我看護かひなくて、なき數に入しは、みとせむかしの秋なりき、今日は其日なりとて父君諸共庭の花折持ちて、青山の我家の墓地へ行きしに、兄君の招魂の墓、其人の墓我等を待顔に淋しく立つ、うちむかへば、彼の泡沫と跡もとゞめぬ兄君の事、臨終に心亂れず、居直りて乞別告げし其人の有樣目の前にうかびくるを、からく念じかへして、そこを立出、伊東師の為にと殘しゝ花持て、その師はかへり行道すがら、父君のこはゝ我親しき友なりしを、こは同じ役所につとめつるをなど、のたまひて指さしかたり給ふをみるに、皆身こそあれ、名は、千歳に朽せぬ人々なり、心ぼそくて堪がたく成つれば、父君よ、おなじほどの御年なりしとのたまへば、いとゞかなし、いかで御身すくよかにてよ、おどうちわぶざいへば、又はかなきとを、心やすかれ、とてうち笑みたまふは、常よりも心やすげなり、又うちかたらひつゝ數多の墓原分行けば、高崎扉子君の御墓の前に出ぬ、いつに似ず女郎花かれ〳〵に成て、圍の垣の門も開きてありぬ、おもはず立よりて、手にもてる枯枝一本さしそへて

うちみるも悲しかりけり女郎花さかりながらに枯し思へば

父君正風大人のよき墓と人のほむるもうれしくと、のたまひし親心、おもひやられて、しばし佇みしが、父君にうながされて、伊東師の御はかにいたりぬ、いまだしるし斗の角なる木にしるしつけられし、御名は雨風にうすれて、我友某等の植し菊の苗いさゝか斗のび立たれども、ことしは花咲べくも見ず、ちりに埋、あたりあれたるに、我しばしまふてこざりしおこたり又門弟多き御弟子等の、いかでかくは、なほざりに、など思ふに、人の上のさがのかなしく、手に持し花手向けて

君が為こそも折つる花なれど手向にせんとおもひかけきや

げにこのよは夢なりけり、伊東師葬式の頃は賑やかなりし地、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

皆新はか立並びて、花つゝながら枯はてし花、なかばより裂落ちし提灯、あるは立のぼる線香の煙、げにそれかとまがふ鳥部の〻煙立さらでのみ、すみはてぬよの習ひ、いみじとはいへど、さてもみじかきこのよ限りの命とおもはば、いかに心細からましなど、思ひつゞけてはふり落る涙ぬぐはんとすれば、左右の手は父君の御手をしかと握りもちてありぬ。

かたみの單衣

川合信水

過る明治二十一年の夏にぞありける、我が甲府より家に歸りし時母上は、病快しとて起き出で給ひ、喜ばしげに我を見そなはせり、我は母上の單衣を見て「新たに仕立給ひしか」といひければ、「然り、よき縞がらなるべし」と答へ給ひぬ、翌年の二月母上は歿し給ひ、此單衣は、かたみとして我着するととはなりぬ、故主を思ふて、新らしき錦衣の上に、舊き袍を着せしといふ關羽ならねど、我にとりては、新たなる衣よりも、此單衣好ましく、身につけては朝な夕な、母と共に在るが如く思ひぬ、さても情けなや、今年夏の末、我坐せんとする時、布古きに、多く着、多く洗濯せし故にや、脆くも裂け破れたり、晝着られぬまゝ、寢衣となせしが、一旦破れしものの、着する度每に破れは益々大なり、嗚呼彼の關羽逝きて既に遠し、袍のこと昔話とはなりぬ、我が母上既に歿して、かたみの單衣も今は破れぬ、病痾の床中、豈一片の感慨なからんや、嗚呼花は開きて花は散り、露は結びて露は消ゆ、榮枯盛衰、觀じ來れば、我は益々永遠無窮の基督に頼る、我れ身を離れて天國に到りし時、基督の御前、母上に會して、かたみの單衣の如何になりしやを語らん。

小説

無想劍

暗光子

第四回　隱れたる雲やくやしき心の月

秋海棠の色に秋の老ひたるも見へ亂菊の籬に淋しげなるもうら悲し、あはれに物思ふ手枕に忍び音響く虫のこへもすがれゆく頃なるに、俊吉郎は久しく籠り居て讀書にのみ耽るにや病むともなく病まぬともなく、立出でゝは淋しき野邊に彷徨、靜かなる夜半の月を見ては物を思ふ、人と對面するを好まず物言ふさへ憂しといふなり、去れど人に逢ふては常の如くさ

して悲しめる色も見せず、唯剛放の氣軟らみて氣慨沈着憂鬱に成りゆきしのみ。人々怪しみて密かに其樣子を垣間見れば晝は多く寐ねて眠りたる顏斜く衰へゆくといふ、去らば夜こそと窺ひ見れば毎夜叡山の方へ潜行を見るとの噂さなり。老僧は聽て痛く氣遣ひ何卒して其爲すよしを見んものと心を碎くも頼もしげなれ。

駿江は父母の位牌を燒きて決心を確め其墓に分れを告げたる朝、思ふ由あればとて旅立の事を俊吉郎に告げたるに、我れ亦思ふ仔細あればとて許さず、數多度乞ふに暫らく待てとのみいふも流石に逆背がたし。兎角する内にいつとはなく駿江は物思ひの人となりて朝な夕な憂き嘆息のみに沈み勝ちとはなれりける。仇に遇はゞ掴みかゝらんとまで張り切りたる強き心も弛みて弱く成り、あわれなる草花も、虫の集鳴も、月の光りも、見れば何となく悲しきように樂しく、小虫殺すも恐れがり、器物を扱ふもいたわるよう成れり。木の葉動くを見ても風といふ文字床しく、筆執りても火箸持ちても我れ知らず平常同じ人の名を書くに、我れから恐かなりと心付きては人もなきに顏赤らむ、茫然と天を眺めては獨り微笑、我れと吾が手を卒然に握りて、自から愕くこと屢々あり。言ひ甲斐なき意氣地なき吾れよと、心の涙を道理で堰止め、情けの火を勇氣もて消せども及ばず。氣兼ね多き困苦の家に氣を張り剛放なる武俠の氣風に慣され來りたる益良女には、兎の毛ほども知り得ざりし戀愛と言ふ劍に心膽を差貫ぬかれし苦さ、斯る乙女が一度此劍に觸れ初めては猛に閃きて止むべきようなし。恩誼深き潔白正義の殿をして露ばかりも浮名立てさすることもやと恐ろしく、是れまでは俊吉郎來る毎に喜ばしげにいそ〳〵と出で迎へ話しさへ明かに談りしが、此の頃は寓然來るさへ嚴かに微笑の顏もて迎へ入れ、席を正して尊敬の禮儀厚く言葉謹みて控へめ勝なり、流石表面は亂れねど胸の混亂いかばかりぞ、其冷やかなる所ぞ最も苦しき熱愛にて無掌心には覗ひ知れぬ温かみあれ、今や女丈夫が佩刀打捨てゝ節操を懷劍に固めたる、羞わり情けある處女とは成りつるあり。此一月程は俊吉郎絶へて來ず音信さへ聞くことなし、唯老僧が懇ろに來りては慰め與るに、何日も敎への道に耳傾けては樂しく聽き、日頃經て道念大に進みゆくに從ふて、人を戀ふる心は生憎に深く成りゆきぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

人世は露より脆し、昨日涙を注ぎし人今日は涙賻けらるゝ人と成る、幻の旅標と墓に咽びたる失愛者も自ら葬むられゆくを知らず、現に仇櫻の夜半にや風の吹かぬものかわ。一夕賤江は食物の良しからざりしにや、夜半頃より腹痛烈しく、夜明けてより老僧始めて知りてければ急がはしく醫招きてかにかくと手を盡すに、こは急症の霍亂なるべしとてあか〳〵に癒ゆべくもあらず、喘ぐ氣息次第に弱まりゆきて物言ふことさへ自由ならず、老僧は靜かに枕邊に居寄りて

「風間殿を喚びにやりしゆへ今に來られん、樂んで待たれよ。

窪みたる目に莞爾と應るも勞敷し。苦痛を忍ぶ剛氣の乙女が自若たれども面色普通ならず、覺悟强ければ取亂す事なけれども煩悶る手足は斷腸の狀見ゆ。病勢次第に弱まりゆく時は此得難き乙女の命も弱まりゆくの時なるぞ悲しき、

「まだ風間樣は……たゞ一目……思ひ殘すことはありませんが………

苦叫の一聲さこそと痛ましく、老僧は瞼しばたゝき、靜やかに摇撫づるに胸もと冷へて氷よりも冷たし。賤江は最早魂召さるゝ時の近付きしを知りたるにや、再び遇ひたしと言ふ事なし、稍ありて聲も幽かに

「天の父よ、賤しき婢の魂を御心ならば今ぞ取去り給へ…

蕭々として晝も鳴き出す蟋蟀の聲魂を送ると思はれてあはれなり。一寸息絕ゆれば万事休するとの悲き、威風凜然たる益良女の姿も、溫容藹然たる處女子が面影も、不幸の涙に覺悟を鍛えし多望の人も、高妙なる道に信念を固たる天女の遺筐も、ア、今は冷たき無聲の骸とはなりけるか。

無常の風そよ〳〵と淋しく殘る梧桐一葉を吹き落し、明り障子に戛然と音する時俊吉郎は喘ぎながら戸を引あけ、蹈込む足を打かへして下駄の緒怫と切れにけり。

「南無三切れたか

「モウ不可

端なく老僧と目合はして、均しく見おろす床の上、千軍万馬にビクともせぬ勇士の顏色忽まち變りて、嚙込む唇 呑 込む涙、胸を叩いて吻く息太し、

「遲かつた〳〵、風間殿見せるものがあるぞへ、賤江どのが膚身離さぬ此文殼知てか。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

操返しくたるものか、揉めきりたる反古の紙、いぶかしくて取り上げ見れば吾が筆の跡『俊吉郎潔白に得す』と書きたる傍に「命かけて……」と、靜江が水莖黑く見ゆ、

「さては彼れもか」

「何を言はる丶」

俊吉郎は赧然として慄えり。老僧は天を眺めて啞然たり。

批評

○聖武天皇

樹袋子

史海第六卷に、聖武天皇論の結構あり。外交政略の爲に唐人の膽を破らんとて大佛を造りたりと云ふは、甚はだ面白き說なれど、之を事因の樣に言做すは、著者自身の論にすら矛盾す。想ふに天皇は理想よりは想像に長じ玉へる方なり（理想と想像との對別は甚はだ奇なり、左れど要するに想像に富めりと云ふものと見ん）託宣を利用し玉ひしにあらず、熱心祈禱の末其現影自から夢寐の間だに現はれたるなりと。又云はく、自ら稱して奴と云ふに至りては蓋し迷信たるを免かれずと。夫れ、迷信するの人、熱信祈禱して遂に幻影を見るほどの人が、主も外交政略の爲に之を熱中したるやふに言做すは少しく矛盾にあらずや。左れど、余は外交說を採る、たゞ著者の文章餘り伸び過ぐるを一言するのみ。聖武の腦中に崇ける佛と宣長等の腦中に崇ける神とは大に逕庭するものにあらざるが如しとは、眞也。左れど、自から稱して奴と云ふを迷信とするは、必ずしも然らず、奴とはサーバントの意なり、熱心の宗教家常に此語を用ゆ、著者之を駁して、天地若し靈あらば我靈は必らず其一部たり、天地若し躰あらば我躰は其一部たりと、揚々得意氣に辨じ玉へど、此は凡神說の信仰にして左程芽出度ものにあらず、たとひ客觀的には其目的を誤まりたりとも、寧しろ奴と云ふ方の宗教の義に適ふには若かず。諸王が皆な年長なりしことを記し「故に少年の愛すべき風情もなくして光明若くは孝謙の鋭眼の下には許多の欠點を具へたるなるべし」と云ふは、何等秀妙の想像ぞ、鼎軒は此邊の人情の觀察に讀者を驚かすこと多し。

○二宮尊德翁

幸田露伴氏の著なり。平素酒氣と毒氣とを帶びたる落筆を轉

じ、此の單素にして眞面目なる有益の文を綴られたるは、子が本來當然の特色の爲に深く祝するところ也。「報德記」の要略にして、左して新らしき說は見えずといへども、今の多言少實の幼年兒に對しては、實に珍らしき讀物なるべし。今日の經濟家はたとへば一種の放埒ものに似たり、分度なく豫算なく身の程を忘て勝手に人の財產を亂す、安んぞ國家の富に益するものと云はん。かゝる人々は先づ此少年文學にても讀みて可なり。

○天無情

大坂の人高安三郎氏の著なり。題名すでに宜しきを得ずといへど、一個信ずる所ろの意見ある人の作とは見ゆ。たゞ理想やゝ高く、觀念甚はだ貧しく、小說の才未だ至らざる所ろあれば、物足らぬ心地せらるゝ所少なしとせず。貧兒の生地を但馬出石とせられたるは何の緣あるや知らず、たゞ編者が生地なるによりいとゆかしく思ほゆ。

○早稻田文學　撫象子

何々批評と云ふはありと云へど、何文學と定めて言出でたらんは、ちと大業に聞ゆ。左れど、久しく隱れて現はれ玉はざりし逍遙子正面に其編者となり、早稻田と云ふ種々の事に連感ある名を戴いて、一派の文學を新たに起さんと爲らる。其抱負の大きやかなるを見て、深く祝す。大西氏が明晰なる論理學、篁村子が院本の評釋、逍遙君のマクベス評註など、見ん人の最とも珍重する所ろならめ。別にしがらみ草紙はありと云へど、亦た此「文學」なかる可らず。「公平なる報道者をもて任ぜんとす」との普告は、定かに然あるべしと豫かじめ信ぜらる。高田君近來忙はしきか、其批評の一節だに見へぬは遺憾と云ふべし。

○ひつじかひ　撫象子

文學世界の第八に、松華菴主人が「ひつじかひ」出づ。牧師が敎會の會嬢と不義し、姙婦六ヶ月緘默して流產の后に死し、牧師は遂に之を隱し畢うせたれど、良心の苦痛堪がたく、辛くも之を筆紙に遺して白狀すとの筋なり。ハウソルンが紅字標を讀たらんものは、此類の小說は何如に能く人の道念と情慾との鬪爭を書現はすとを得るかを知らん。然るに、本書に現はれたる牧師の痛悔は極めて淺々しく、其良心は平々凡々にして俗人の感想に異ならず、尤とも下等なる牧師にすら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

存する普通の心覺を寫さゝるを以て、わざ〳〵其狀白者を牧師にしたる丈のちとの効驗もなし。もし之を田舍小學校の敎員なりとすとも尙好く當はまるべし。如此くば小說として巧みなる方にはあらざる也。

○少年之友　新誌子

第二編第一號より、大江敬香氏主筆となれり。見るべき論文多きうち、取分け、日本名士發談の評、甚はだ要緊に當れり。蓋し熟知の人に與ふるが爲めか。少年の人常さに一讀すべき價値あり。

○北光會雜誌

松村界石君北越學館に歸敎す、吾人は太く之を祝するもの也。之と共に北光會雜誌其第十號より更に氣焔を吐けり、云く、吾人學生が抱負する所未必ずしも少に非る也、徒に空言高論せず、寧ろ躬行實修を望む、慨慷死に就んより從容義に從はんとを欲す、衣至て粗袖至て腕てふ外貌的の壯士を氣取らず、而も溫容柔和沈思熟考大成を期すと。此邊の消息今の首府の靑年にすら乏し。吾人は深く彼天の北越に望む。

○黨　報

自由黨の黨報なるもの出づ、外に色々の自由主義の新聞あり夫々に黑闘らしく言ふ樣聞ゆれど、正當の黨報は即はち之を見るべし。自由黨の彌よ肅然一色となるを賀す。

○滑　稽

滑稽は避雷針の如し、時に効なきに非ず、然れども眞正の滑稽は嚴肅眞面目なるものにあらずば得ると難し。此意義に於て、圓珍のヲドケ、頓智協會のウイットは果して味わりや否やを知らず。新に生じたる雜誌「滑稽」も亦た其邊の用意あらまほしと云ふ。

○「峽中」を讀む

此一書、峽中の人小野八代曆氏の著す所、卷を開けば序文十一あり、本文讀み來れば、細かに項を分ち、思ふまゝに評論す、隨筆として見るに足るべし、たゞ宗敎上の確信に乏しく、深く、大きく、遠く覩るの眼識に於て缺くるところあるは、誠に惜むべきなり、されど我は感ず、著者妙齡にして、一氣走筆、此百六十頁を染めしとを、豈一片鄕國を思ふの熱情なくして然るを得んや、我は著者の益々勉められんとを望むものなり。同じく峽中の一學生、川合信水　妄評

笑ひ草

○此夏ごろ木賀邊の避暑に伴われし少女、湯亭の欄干へ寄る人毎に景色〳〵と語るをきゝ、何のとか判然と分らず、たゞ何となく手欄の向ふにある處を指すと思ひ、或る日近頃漸くつかまり立する弟が、手欄に戯るゝ側へ走りより、

アレ坊や、景色へ落るといけまちゑんよ。

○ある家の下女、頰に頰をふくらせて、奥樣やがて、手をつき、

下女　アノ奥樣へ、士族と申せばわたくしどもとマアどこが違うので御座い升　、變なことをうかゞふ樣ですが。

針箱のまへへ坐りし奥樣、其樣子を見て、ホヽ笑み、

マア、何のこつたへ？改つてそんなことを尋ねに來て

下女　なに、外でも御座いませんがネ、うちのおふさゝん（食客ばゝのこと）がなんだつていふと、わたしは士族で、どふで、かふでつて鼻へかけて仰つしやい升がネ、今朝つてば、戸棚へ頭をつくこんでお摘もして入つしやるんです。そんなことなら、矢つ張り、わたくしたちと違ふ處はない樣だと思ひ升てネ、それで奥樣におきゝ申に參つたので御座い升よ。

時事

○新聞紙上の文字

大道廢れて仁義の聲嚣々たり。眞の善は右の手之を爲して左の手之を知らざるものなり、無意識外に出でゝ善は既に僞善に近づく。近來新聞紙上、至誠、正義、犧牲獻身、新聞記者の德義など云へる文字甚多くなりぬ。中には、何如がわしき疑を蒙むり、其罪名未だ白からざるものすら、逆りに慨然として道義を講ずるなり。

○廣　告

廣告文も亦た法螺の音の如し、たゞ響くのみにて人を感動せしむることなし。近頃ろ、二種の新聞紙の廣告文を見て、誰か抱腹せざるものあらん。

○輿論と議會

議院政治に對する、内閣と議員との手落を戒しむるは不可なるにあらず。然れども之と共に輿論議院外に運動するの準備を爲さずんば、百の讒謗も一毫の効なし。去年議院外に運動の準備を爲したるものは、たゞ壯士のみなりき、豈に壯士に

一任すべきならん。本年は議院外の民間人士先づ大に討議すべし、徒らに議員をのみ責めて、自から之が應援を爲さゞるは、卑怯も亦甚だしきもの也。

○女役者

男女混淆演劇は官の許す所なれど、未だ實地に之を奏するものあらざりき。依田學海翁率ゐつて其發起に任じ、近日吾妻座に於て男女混淆の改良演劇を催ほし、自著「淑女操」を臺帳に用ひしむるよし。願くは、其醜を出さゞる内に其美を發揮せんことを。

○高等中學

高等中學廢止説は、議員中多數の同意を得たり。本年は、よし其悪習は廢せられずとも、三以下は必らず死すべし。

○大學新設

之に反對にて、大學を增置すべしとの説、意外に勢力を得たり。增置する或ひは可なり、只だ目今の如き大學を二つにするは國益にあらず。先づ大學と云ふものゝ性質を一變せしめざる可らざる也。

女報

可愛子編

●皇后陛下御出迎　皇后陛下には、天皇陛下御出迎として、去る廿六日午後三時三十分御出門新橋停車場へ行啓あらせらる。

●皇太后供奉として　去る十九日、侍從子爵富小路敬直氏を差遣はさる。

●皇太后陛下の御健足　京都御滯在の皇太后陛下には本年五十八歳に渡らせらるゝも更に御老衰の御摸樣なく去る二十日修學院の行啓の節の如き、同山頂迄は八町に餘まり崎嶇羊腸の道路なるに、更らに厭はせ給ふ御氣色もなく御登山あらせられしには、皆々驚喜の涙に咽び、其御健康を祝し奉りしやに承る。

●下賜金　去る二十日皇太后陛下銀閣寺へ御立寄り在せられしに就き同寺住職菅元碩師は其御禮に上りたる處特に同寺へ金二十圓下賜あらせらるゝ旨御沙汰ありたる趣きなり。

●朝彥親王殿下病氣訪問　さし守正王、榮子女王、絢子女王、篤子女王四殿下は去る廿四日久能親王、載仁親王兩殿下は廿六日に孰も勢州宇治表へ向ひ出發あらせらる。

●看護婦の演習　小松宮御息所を始め土方子爵夫人、上野御用掛夫人、井上海軍少將夫人、宮內秘書官長崎省吾夫人、花房宮內次官夫人、鮫島陸軍中佐夫人は、赤十字社員の資格を以て硝烟砲聲の間を馳驅し居られたるは甚だ勇ましかりしと。

●近衞公爵夫人逝去す　近衞公爵夫人衍子の方には、此程分娩して男兒を擧られしが、產後肥立あしく終に去る二十日を以て逝去したり、享年二十三實家は前田家にて今の公爵及び有栖川若宮妃殿下御息所の爲めには妹君なり、夫人は先年近衞家へ輿入れありしも、公爵は合卺の翌々日を以て歐州へ出立し、漸く昨年歸朝し間も無く一男を擧げたる事なれば、公の歡びも左こそと思はれたるに、今此訃音に接す其慘傷察するに餘りあり。

●皇族假服　威仁親王妃慰子殿下は、妹近衞公爵夫人の喪に丁り、去る二十日より定式の假服を受けさせられたり。

●彰仁親王妃頼子殿下　は去る十九日出發、相州近衞兵演習地へ旅行せられたり。

●勝伯婦女に武藝を學ばしむ　世は遊逸に流れて尙武の風日に衰ふるを慨したる勝伯爵は、縱へ婦女なりとて薙刀の一手位は辨へ、事あるときは國に殉するの氣風を涵養せざるべからずとて、此頃は擊劍家榊原鍵吉氏を家に聘し日々家內の婦女に薙刀を教へしめ居れりと。

●日本好の英國婦人　永田町大山私邸に住居する英國貴族カロックス夫人の令嬢ラベット令孃は、非常に日本の風俗を愛し、家に在る時は必ず日本服を着し、茶

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の湯、活花、彈琴等を此上なき樂みとなし、近頃は古代の能服を數多買ひ入れて舞曲を學び居れり、又俳諧を善くし間々本邦人の企て及ばぬ秀句を詠じ出づるとありと、嬢は近日日本風園遊會を催さんとて其の支度中の由に聞く。

●高原みね子の葬式・は去る二十三日麹町區一番町教會に於て施行し、我社の巖本氏、同女の略傳を述べたり。

●久保梅韻女史逝く。府下小石川區新諏訪町の久保梅韻と云へる女史は、豫て明清樂其他茶道に堪能の譽れ高く、先年東兩國井生村樓に於て樂會を催ほせし時などは、清國公使館の參贊官諸氏を始め朝野の名士等之に臨み一時其道の隆を極めしが、定業は免れ難く此程竟に還らぬ旅に赴きしかば、有名なる長原梅園宗匠を始め其向の子弟等打揃ひて野邊の送を營みしとなん。

●女學生　東京府高等女學校に於ては、來る十二月中師範科を卒業する者凡そ三十名ある由。

●女子高等師範學校教授椿蓁一郎氏　は此程文部省視學官に兼任せられたり。

●同校教授篠田利英氏　は祝日大祭日歌詞及樂譜審査委員長を命ぜられたり。

●女子高等師範學校生徒の數　本年六月三十日文部省の調査によるに、同校生徒の數は、高等師範科現員八十七人入學二十六人卒業十七人、小學師範科現員五人入學四人卒業一人、附屬高等女學校現員百五十七人入學六十三人卒業十五人、附屬小學校現員二百二十人入學四十五人卒業四十七人、附屬幼稚園現員百七十人入學五十九人卒業生は無し、合計現員六百二十九人、入學百九十七人、卒業八十人なりといふ。

●尚東京女子師範學校々員及卒業生秋季懇談會　は來月一日小石川後樂園にて終日催す由。

●南摩羽峯氏の詩　高樓巍々聳碧空。宏壯堅緻氣象雄。中容窈窕女教育。教育有法醫學隆。書畫圖繪及組紃。裁縫刺繡奪天工。不徒孜々學末藝。能修其基內德崇。蓁々桃葉適其時。要在中饋內助功。自此應生賢子女。自此應致貨財豊。嗚呼殷富之源齊家本。在此巍々高樓中。

明治辛卯九月女子職業學校新築成詩以落之　羽峯南摩綱紀

●大日本婦人衛生會に　名譽會員子爵夫人毛利保子氏より金五圓寄附せられたり。

●外國の婦女保護法案大に精密を加ふ　昨年貴族院に提出したる同法案は、青木外務大臣の發意により制定せられたるものにて、其條文は極めて少なく其目的は唯世間へ對する申譯に過ぎざりしが如く粗漏を極めたるものなりし故、同院にては之に修正を加へ內國にて十分に取締りをなし得るやう箇條を追加し且罰則等の制裁を加へんとしたりければ、青木大臣は之を不滿とし撤回するに至りたるも、政府內部にては昨今非常に同法案の必要を說く者多く內閣及び外務司法兩省にても大に之が必要を感じ居れりとの事故、多分本年の議會には提出することなるべく而して其法案も大に昨年に比して詳細を加へ綿密に取締をなし得るやう改めたりと聞けり。

●千葉縣下にて小學校女教員の俸給　は訓導平均九圓三十三錢三厘、授業生は三圓三十錢なり。

●千葉縣尋常師範學校　にては女子の教員二名あり、本年の卒業女生は十三名。

●「カーヴヰン」女教師　は去月三十一日播州多可郡に赴き、翌一日、大垣內村基督教講義所に於て神の愛を說く、會する者男子十名、婦女七十名許なりしと。

●女子部設置の問題　此程聞く所によれば茨城縣尋常師範學校內に女子部を設置せんとの事は、暫らく見合することになりしと云ふ。

●女學雜誌を讀る　茨城日報の紙上に、那珂第二高等小學校二年生石井はつ女が頗る勉強の事柄を記載せしに、水戶市原町四丁目に寄留する一香生てふ人は、該記事を見て殊の外感心し、奬勵の書面へ女學雜誌或部を添へて、はつ女の許に贈りたりと。

○駿豆義會　の青年は廢娼運動の爲に勸告文五千枚を印刷し、青年に、登樓者に、各地方に、會員はらじ掛にて配布せられたり。

●廢娼大演說會　大阪青年會は秋期運動の手始めとして近々廢娼大演說會を開く由。

●廢娼運動　福井市及同縣下の有志者は、目今開會しつゝある福井縣會へ廢娼の請願を爲さんとて頻りに盡力中なるが、縣會議員中にも贊成者尠からず、隨分勢力ありと云ふ。

●廣島縣下公立小學校の女教員　は三十六人あり、前年に比して十一人を減ず、授業生は、公立小學校に百十七人、私立に四人あり。

●廣島縣下に於ける各種學校の女子　同縣下にての私立學校には、教員五名あり、生徒は八十一人あり、前年に比すれば女生徒の數十五人を增す。

●香川縣尋常師範學校の女生徒　は二十四名あり、女生徒の體操としては、普通體操及び戲遊法を授く、又女生徒の實地練習に供する爲め、附屬小學校に幼稚科を置く、幼兒の現員六十人。

●千葉縣下に於ける學齡就學の女子　は二万六千百六十九人なり。

●秋田婦人學會　は會員をば名譽會員、特定會員、通常會員の三種に分てり、修業の課程は、讀書、算術、及び修身、衛生、地理、歷史、理科、家事、音樂等に關する談話にして、時は日曜日の午前に定まれりとか、又二ヶ月に一回常集會を開き演說、談話等あり、總集會は一年一回にして同じく演說談話と、新出等あり、本會創立は明治二十二年九月、會員は當今百五十名に近し、去る八月二十三日より「報告」と題する雜誌を發刊せり。

●慈善家　京都市下京區錦小路通烏丸東入福田もと(四十七年)は、昨年より京都婦人慈善會に加入し慈善の事業とさへ云へば金錢を投ずる事土芥を抛棄する如く、義捐寄附金を爲して惜まざるが、去四日京都府高等女學校に於て開會したる京都婦人慈善會へ出席して向後五十年間の會費を一時に出す故受納せられたしとて述て、六十圓を出したるにぞ多くの同會員は其奇特の心を大に嘆賞したる由なり、尤も同女は從來匿名にて金員を寄附したる事も度々ありて實に稀なる慈善家なりと云。

●福島縣通信　●貸坐敷廢業　福島縣磐城國磐前郡湯本村中村樓事原岡音吉氏は、八月廿九日を以て斷然貸坐敷業を廢して正業に復せり、因に記す該地は縣下有名なる溫泉場にして、不義醜行の巢窟とも云ふべき地にして、然も當地繁榮の貸坐敷にして、果然此美挙ある、實に喜ぶべき也。

●宮城縣通信　●宮城女學校文學會　は去る十六日同校內に開かる、生徒の奏樂、文章、學、演說等あり、唱歌には生徒自作のものもありたり、內外の來賓堂に滿ち、頗る盛會なりき、(因に記す同會は毎月一回開き、雜誌をも出す)。

●福井縣通信　●高等女學校　福井縣にては此迄尋常中學校內に女子部を置きたりしに、來る廿五年度より單立して高等女學校と名稱し、以て一は普通高等教育を教へ、一は女子小學教員を養成する見込なり、目下中學女子部の生徒七十

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四人あり。

●女子教員の需用　近來當縣下各小學校にては女子教育の必要を感じ、從て女教員の需用大に増加したれども、供給之に應ずる能はず、爲めに女教員は比較上高給を受け對遇優等なり。

●高知縣通信　●女子手藝傳習所　生徒は七十餘名あり、授業時間は午前八時より午後五時に至る迄にして、午前八時より午後二時迄は裁縫科、二時より五時迄は刺繡科、造花科を教授し、教場は當時創業の際なれば未だ全くは整頓せざれども、正教師は中村千賀女史之に任じ、千頭龍女史之を補助して、懇切周到に生徒を教授し居れり、裁縫科は特別科、正科の二に分ち、特別科は正科より其程度一層高し、造花科刺繡科は何れも第一學期にして、目下造花科には花葉、刺繡科には手巾の花紋等を教授し居れり。

○高知縣尋常師範學校女子部本年に於る卒業生は二十六名にして、悉く高等小學校或は尋常小學校の訓導に任ぜられたり。

○尋常中學校女子部に於る本年の卒業生は二十九名にして、現在生は八十四名也。

○英和女學校はミッションスクールにして明治廿年に創立せり、教師は米國婦人三名、本邦人教師男四名、女壹名、現在生徒五十餘名あり、生徒は毎週金曜日に會合して慈善袋を製し、之を賣り利益金を蓄積して、貧民救助若くは其他の慈善業に費消する由、同校同窓會より發兌する會誌の如きは既に四號まで出版せり。

○今般當地に一つの貧民學校を設立せり、其目的は公立小學校に入學すること能はざる極めて貧困なる幼兒を教導撫育せんが爲めなり、其發起者は小谷喜子、山崎竹子、吉岡さり子、荻原せん子、山田信子、外山榮衍子等なり、維持は其他教徒有志者の義捐金に依る。

●スミス氏未亡人　故大藏大臣ウイリヤム、ヘンリー、スミス氏の未亡人は貴族に列せられたり。

●貴婦人の喫烟　先頃來西洋の雜誌に貴婦人の喫烟に就き種々さまらぬ評判を記載するは正に當時該時事の記載すべきもの丶少なきに依るとは云はざるを得ず、されど維納府の婦人雜誌フレムデムブラットが名指し載せたる多くの喫烟を好嗜さる丶貴婦人表を見るに至ては、殆んど驚愕せざるを得ざるなり。此記事に就き同國女王エリザベス殿下が同誌に背書答辯せられたる文中に曰く「御社雜誌中に名指御記載相成りたる他の貴婦人に關しては其眞偽如何や存じ候はねども、西班牙國攝政皇后クリスチナ陛下に關しては、余は判然然あらぬ事を明言致す處に候、同皇后陛下が未だ當國皇女にて在せし頃は、勿論喫烟などは思もよらぬ事又西班牙國御入内後さても、決して此かる御事なしと承り候。況して該國の風下民間には此風習頗りなるも、上流社會にては左程に行はれざるよし聞及びたるに於てをや」云々（コニチン、シグナル）。

●基督教會婦人の事業　近頃チカゴ府聖ポール教會にては、此迄あまり聞及ばざる、さりながら婦人に特に有益適當せりと思はる職務を新たに設けぬ。そは近頃同會は一万弗の遺産を受け嗣ぎそが利益を傳道費に充てんと云に當り、即ち一婦人を撰舉する事とはなりたり。其職たる一地方に在りて教會及牧師を輔助する事にして、即ち其地方に異國人の來住するあらば、先づ到りて之を歡迎し、同地方の人々に紹介し、病氣其他あらゆる必要にして牧師の注意を要するものは之を周旋し、慈善救濟を與ふべきは之を爲し、小兒の狀態に常に注意し教訓し、病患其他の事を保護し、日曜學校監督者に力添して其教師を周旋し、其他諸學校及教會出席者の爲又は諸週の集會婦人、各種の會等大凡必要と認むる善良なる働きに、万端盡力補助する等の事にして、大に人民の滿足を得、牧師の便又少なからず。且外來人も大に幸福を得、万事好結果を呈せりと云ふ。若し吾等が各教會內均しく此かる性質の婦人を撰びたらんには、愈々教會の高徳を感ずる事の多かるべく、又高等教育を受けたる思慮熱信の婦人中には、此かる務めに當たるべき人を得る事さまで難きとあるまじ。

●エドミアデス孃　先年モロカイ島に斃れたる彼のファーザーダミエン氏に次ぎ、同島に行かれたるシスター、ローズゲルツルード女史の事業を繼ひ嗣がんとて、毅然生國英吉利を後にし、同じく癩病島とまで惡名されたる此國に行れたる、エドミアデス孃は、此度癩病人の住居としてマンダレーに開かれたるウエスレー傳道會社に同盟し、此大なる働に從事せんと望み居らる丶と云ふ。孃は兼て醫術を研究し免狀をさへ取られたり。

●婦人鳥毛使用禁止會　遠く波浪を越へて渡り來る森林中の余響が唱歌者にして且其が裝飾者なる彼の小鳥の羽翼を使用するを禁止せんとの會を有志婦人が設立せられてよりは、實際既に非常なる影響を流布したり。同會婦人等は、嘗て神が造りたる尤も過失なき物を殺害して自己を飾ると云々と云へる、ブラウニン氏が詩に奮起し、愈々熱心婦人間に盡力され、爲に近頃は白鷺及他の鳥類等殆んど此かる目的の爲に殺害さる丶となきと云程に至れり。隨て頭上に之を裝飾するの流行も大に減じ來れり。

●ヘンリーノルマン氏の結婚　英國パルマル新聞社員にして近年世界を週遊し其途次我國へも渡來されたる同氏は、此度メニーミュリエルドウイー孃と結婚の約を結びたり。孃は、ロバートチエンバー氏の孫にして、嘗てカーペシアンの娘と云ふ雜誌中に一冒險に勇進する小女英雄なりと記されたるとあり。彼等は其初め互に讀たる類ひ相似たる冒險の旅行の話等よりして、其交際愈々深密となり、遂に孃が手を得るに至りたり。氏は兼て才學共に警奕なりとの聞へあるを以て、未來に於ての氏人の望、愈々兩人に集まらんとは云ふ。

●日本全國卒業女學生一覽　は紙面の都合により次號に讓す。

品名	廿九日
白米（一石付）一等米	一斗〇升[illegible]合
二等米	一〇六
三等米	一〇八
四等米	一一三
五等米	一一九
正米（一円付）越中米	一斗五升[illegible]合
尾張米	一四六
伊勢米	一三三
秋田米	一五四
一志米	一四八
雜穀（一円付）本貫大麥	一斗[illegible]
上州小麥	一九〇
竹林麥	二一〇
梅澤大豆	二一五
青柳大豆	二一八
吟小豆	一七五
白胡麻	一三五
黒胡麻	一七〇
鹽（一円付）赤穗	[illegible]
大鹽	三一〇
本齋	五一〇
新齋	五四〇
醬油（一石付）最上	[illegible]
極上	[illegible]
上物	[illegible]
中物	[illegible]
並物	[illegible]
味噌（一円付）地製上白	七、〇〇〇
同上赤	七、〇〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	廿九日
眞綿（一貫付）上々入金	一二〇、〇〇
上入金	一一三、〇〇
並入金	一〇六、〇〇
松入金	一〇五、〇〇
竹入金	一〇〇、〇〇
梅入金	九[illegible]、〇〇
絹糸（一斤付）本練花色	二六、〇〇
同色物	二五、〇〇
羽二重物	二四、〇〇
同稀上黒	二五、〇〇
色物別上	二四、〇〇
紅糸太筋	三二、五〇
芥子糸	二八、〇〇
同藤色	二四、〇〇
極天色物	三三、五〇
色物太練	二五、五〇
紡績糸	四五、〇〇
濱縮緬（一疋付）大巾上馴	三、一〇
小巾百廿目立	五、五〇
同並物	五、〇〇
六丈絹猩々紅五十目立	二、五〇
結生絹（一疋付）六十目附	二七、〇〇
七十目附	二七、〇〇
八十目附	二八、〇〇
百目附	二八、〇〇
毛糸（一斤付）和染鶴印	九五、〇〇
ゴロス寄紙印	一〇二、〇〇
スコッチ四本撚	八〇、〇〇
同三本撚	八五、〇〇
同並物	七五、〇〇

品名	廿九日
乾海苔（百枚付）洲崎	[illegible]
大森	[illegible]
深川砂村	[illegible]
大師潮田	[illegible]
仙臺	[illegible]
鰹節（十本付）土佐上	二〇、〇〇
薩摩大	二二、〇〇
伊豆上	二五、〇〇
城の腰	二一、〇〇
房總上	二〇、〇〇
銚子上	一九、〇〇
水戸磐城上	一八、〇〇
南部仙台上	一四、五〇
炭（一俵付）伊豆上	四五〇
同次物	五六〇
同並物	六五〇
九備上	二二〇
洞淺上	四〇〇
角備上	二九〇
同淺上	四〇〇
切炭	七五〇
水油（一石付）地水	六、四五
胡蔴	八、八〇
荏油	九、一〇
桐油	六、〇〇
綿油	七、三八
坂水	七、四〇
石油（一函付）チヤスター	一、六〇
デポース	一、六一
ホーキ	一、六五
ロシヤ	一、五九

女學雜誌社出版書目

著者	書名	冊數	價
鈴木弘恭大人述	つれ〲草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著	産婦小兒攝生法	一冊	金十六錢
關輪正路君録	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子君著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演説	廢娼演説	一冊	同五錢
巖本善治君述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三君著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野恒之介君著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木雍辰君著	和書手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治君著	鐙子小傳	一冊	同八錢

下六番町六番地

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社取次書目

金森通倫君著 日本現在及將來之基督教	一冊	價	二十錢
池袋清風君著 淺瀬の波	二冊	同	三十錢
花房庸夫君著 明治女大學	一冊	同	二十錢
松田敏足君著 女小學躾草	二冊	同	四十錢
吉田利行君著 日本女子讀本	三冊	同	三十九錢
香月恕潔君著 女子文例	一冊	同	二十五錢
安東松次郎君著 貧兒の教育	一冊	同	六錢
湘煙女史著 善惡之岐	一冊	同	三十五錢
安枝武雄君編輯 正義の反響	一冊	同	十五錢
鈴木弘恭大人著 作文口授	一冊	同	二十八錢
三島通良君著 母のつとめ	二冊	同	七十錢
新倉錠次郎君編 國文自在	一冊	同	四十錢
坪谷善四郎君著 日本女禮式	一冊	同	五十錢
木村駿吉君著 新編物理學	一冊	同	六十五錢
元良勇治郎君著 心理學	一冊	同	五十五錢
鈴木弘恭大人著 國文抄	續出	同	三十錢
三上參次高津鍬三郎君著 日本文學史	二冊	同	一圓六十錢

迎接日 毎木曜日午后三時ゟ 横濱ハ第四土曜朝
巖本善治

診察所 日本橋區大傳馬町二丁目廿五番
住宅 外神田和泉橋通松永町二十三番
渡邊泰

女醫 下谷西黒門町廿二番地
荻野吟子

保險附風琴各種精製廉價販賣ス
麹町區三番町四番地
風琴製造所
風琴直シ御報知次第直ニ參上極廉價ニ修覆可仕候

廣告
本會儀今般移轉致候處會員中住所不明之者有之名簿調製上差支候間至急御一報願上候
追テ機關雜誌發行ノ計劃ニ候間改正規則書御入用ノ諸兄姉ハ郵券二錢御送付ヲ乞
芝區新堀町三十一番地
大日本進德會假事務所

廣告	一行	十錢宛	
雜誌	一册	六錢 郵税。五厘	(但府内無郵税)
	十一冊	五拾八錢 郵税。五錢	(同前)
定價	半年分	壹圓四拾三錢 府外は	壹圓五拾六錢
	一年分	貳圓六拾錢 府外は	貳圓八拾六錢

東京市麹町區下六番町六番地
發行所 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

金森通倫君著 日本現在及將來之基督教	一冊	價二十錢
池袋清風君著 淺瀬の波	二冊	同三十錢
花房庸夫君著 明治女大學	一冊	同二十錢
松田敏足君著 女小學躾草	二冊	同四十錢
吉田利行君著 日本女子讀本	三冊	同三十九錢
香月怨溪君著 女子文例	一冊	同二十五錢
安東松次郎君著 貧兒の教育	一冊	同六錢
湘煙女史著 善惡之岐	一冊	同三十五錢
安枝武雄君編輯 正義の反響	一冊	同十五錢
鈴木弘恭大人著 作文口授	一冊	同二十八錢
三島通良君著 母のつとめ	二冊	同七十錢
新倉鋌次郎君編 國文自在	一冊	同四十錢
坪谷善四郎君著 日本女禮式	一冊	同五十錢
木村駿吉君著 新編物理學	一冊	同六十五錢
元良勇治郎君著 心理學	一冊	同五十五錢
鈴木弘恭大人著 國文抄	續出	同三十五錢
三上參次高津鍬三郎君著 日本文學史	二冊	同一圓六十錢

横濱ハ第四土曜朝 巖本善治

診察所 日本橋區大傳馬町二丁目廿五番
住宅 外神田和泉橋通松永町二十三番
渡邊泰

女醫 下谷西黒門町廿二番地 荻野吟子

保險附風琴各種精製廉價販賣ス
麴町區三番町四番地 風琴製造所
風琴直シ御報知次第直ニ參上極廉價ニ修覆可仕候

廣告

本會儀今般移轉致候處會員中住所不明之者有之名簿調製上差支候間至急御一報願上候
追テ機關雜誌發行ノ計劃ニ候間改正規則書御入用ノ諸兄姉ハ郵券二錢御送付ヲ乞

芝區新堀町三十一番地 大日本進德會假事務所

廣告	一行	十錢宛	
雜誌	一冊	六錢 郵稅五厘	
	十一冊	五拾八錢 郵稅五錢	
定價	半年分	壹圓四拾三錢	府外は 壹圓五拾六錢 (但府內無郵稅)
	一年分	貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢 (同前)

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY